

## ITP-AA 派遣報告書

地域文化研究科 博士後期課程 岸田圭司

派遣先：ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院（SOAS）

受入教員：Dr. Nelida Fuccaro

派遣期間：2009. 9. 27-2010. 3. 26（6ヶ月）

### 研究テーマ

イギリス在住クルド移民のエスニック境界に関する人類学的研究

### 研究概要

本研究の目的は、政治難民や労働者として世界中に離散するクルド人について、その主要な移住先のひとつであるイギリスを事例として、言語、宗教、親族などに基づく多様な社会・文化的境界がどのように維持され変容しているのかを人類学的に考察し、トランスナショナルな空間における少数民族のあり方を探ることである。

イギリスにはロンドンを中心に約 20,000～100,000 人のクルド人が居住しているとされる。彼らの出身国はトルコ、イラク、イラン、シリアなど様々であるが、彼らにとって、移住先の空間は、20 世紀初頭に人為的に引かれた国境線で分断された隣国に暮らす同胞との出会いの場を提供する。クルド人として包摂される人たちの間では、初対面では意思疎通が困難なほど差異のある多様な方言が話されており、宗教・親族など文化的背景が異なる集団が複数存在している。ゆえに彼らは移住先で、自国を出るまで知りえなかった同胞との文化的差異を直接的に体験すると考えられる。

本派遣においては、上記の問題意識に立ち、クルド人コミュニティへの参与観察と公文書調査に重点を置いた。前者においては、調査の糸口として民間団体に注目した。新規移住者の増加に伴い、先に定住したクルド人が同胞支援のための団体を設立、運営することがみられ、それらをイギリス行政も財政面等でサポートをおこなっている。公的機関であるチャリティ委員会（イングランドとウェールズを管轄する）に登録し活動を行っている団体も少なくない。彼らの主な仕事は、英語が不得手な新規移住者への地下鉄の乗り方、光熱費の払い方等生活一般に関する情報提供、行政文書の翻訳やクルド語教室の運営、コンサートや踊りなどの文化的活動、さらには同胞が集うコミュニティセンターの運営等が挙げられる。これらの活動に同行させてもらい、どのような文化的背景を持った人たちが集まっているのか調査をおこなった。また、派遣期間中に行われたクルド映画祭、イラク連邦議会選挙の在外投票、新年祭などの参与観察をおこなった。

後者（公文書）については、イギリスは委任統治の受任国としてイラクと歴史的関係が深く、貴重な情報が公文書に多く残されており、それらの渉猟をおこなった。派遣先のSOASでは、受け入れ教員のNelida Fuccaro先生に調査に関するアドバイスを受けながら、学部・大学院の講義の聴講を許可してもらい出席させていただいた。イラン、トルコ、イラクなど中東地域の近代史を総合的に取り扱う講義を受講できたことで、中東地域を俯瞰的に見る視点の重要性を改めて確認した。また、豊富な蔵書で知られる図書館で文献調査を行い、世界的にも貴重な史料を閲覧することができた。そして、Nelida Fuccaro先生に紹介していただいたクルド人から在イギリスのクルド人学生組織の紹介を受け、彼らが主催するセミナー・講演に積極的に出席した。その機会において、イギリスで研究活動をおこなっているクルド人大学院生・研究者、クルド人に関する研究をおこなっている非クルド人の研究者と知り合うことができた。帰国後も彼らとメールや電話を通じて意見交換できる環境になったことは、今後研究活動を続ける上で大きな財産である。

#### 具体的成果

クルド人コミュニティに関するフィールドワークを通じて、在ロンドンのクルド人ネットワークの在り方の一端が明らかとなった。また、公文書館の歴史文書からは、クルド人のイギリスへの移住過程の一端が明らかとなった。

#### 今後の課題・問題点

本研究を進める上で、クルド語ソラニ方言習得の必要性を痛感した。派遣期間中、知人のクルド人に家庭教師をお願いし、1週間に4時間程度のクルド語ソラニ方言の学習をおこなったが、文字・基本文法を終えた段階で時間切れとなってしまった。今後も知人と連絡を取りながらクルド語の学習を続けていきたい。

本調査で収集してきた史・資料の整理を2010年夏頃までに完了させ、年度内にそれらを基に論文として書き上げ査読付き学会誌への投稿を積極的に行いたい。